

日本メキシコ学院・日本コースの独自性と教育実践

前日本メキシコ学院・日本コース 教諭

神奈川県横浜市立不動丸小学校 主幹教諭 菅 田 真 治

キーワード：メキシコ、交流、自尊感情、カリキュラム作り、異文化理解

1. はじめに

日本メキシコ学院は、日本人（小・中）が通う日本コースとメキシコ人（幼・小・中・高）が通うメキシココースが同じ敷地内にあり、普段から交流を行っている世界でも珍しい学校である。ただ、創立されてから40年程が経ち、これまでの学校運営や交流方法を見直しても良いのではないかと考えさせられることがあった。そこで、「現地教育事情等」を特殊性を持つ本学院とそれに付随する教育事情とし、私が派遣期間の3年間で取り組んできた調査・研究として作成し、報告する。

2. 本学院における児童生徒及び現地教育事情の実態と課題

(1) 海外にある日本人学校という特殊性と本学院の独自性より

課題① 児童生徒が自主的・主体的に活動する環境と機会の不足

私が本学院に勤務し始めた当初の児童生徒の印象は、「覇気が感じられない」「教師の言うことに対して従順」「指示されたことに対しては熱心に取り組む」というものであった。しかし、勤務し始めてから、既に勤務している他の教職員からも同様のことを聞く機会が多くあった。そこで、私の児童生徒の印象は、本学院児童生徒の実態であることが分かってきた。この児童生徒の実態の原因は、教職員の入れ替わりが多いという学院環境にあると考えた。派遣教員は2、3年で入れ替わるため、どうしても児童生徒をゆっくりと育て、育むという時間的な余裕がない。そこで、どうしても教員主導の指導が中心となっていたのではないかと考えた。

課題② 学習内容・学習環境の精選

海外にある学校では、共通している課題であるかもしれないが、日本の学校に比べ、児童生徒が日本語に触れ、日本語で考える機会が著しく不足していると感じることが多い。そこで、学校での学習が児童生徒にとって最大の日本語の学習機会であることを痛感した。加えて、学習指導要領に記載されている内容を海外で教えるには、日本とほぼ同様の学習環境が整備されている必要がある。この環境を海外で如何に創り、如何に現地の環境と融合させていくかが教師としての責務であると考えた。

課題③ 日本コースとメキシココースの有機的な交流の実現

本学院は日本人とメキシコ人が同じ敷地内に校舎を持ち、普段の学校生活で互いに交流し合っている、世界でも珍しい学校環境にある。そこで、メキシコ独自の文化的行事や日本独自の文化的行事、互いの入学式・卒業式で積極的に関わり、異文化理解を図っている。ただし、近年、単なる共同参加の取り組みが多く、両国の児童生徒が交流に意味を見出し、意欲的に参加しているのか疑問に感じることもあった。それは教師も同様で、交流ありきの活動となっていた。そこで、日本コース児童生徒にとって、無理なく、自然体で取り組み、且つ、日本コースとメキシココースの児童生徒が有意義な学び合いができるつながりを創りたいと考えた。

3. 各課題（①～③）に向けた調査・研究及び実践（第3、6学年担任、小学部・学部長、生活指導部・部長として）

(1) 課題①に向けて「教師からではなく児童生徒が自ら行動を起こせる土壌作り」

○「こころのかみアンケート」（生活指導部・部長として）

現在の児童生徒が、どの程度「自分は他者からも認められている」「自分にはこんな素晴らしいところがある」「不十分なところも含めて自分が大切だ」などと自分自身を認識しているかを測る指標が必要だった。そこで、自尊感情を測るアンケートを参考本（「子どもの自尊感情をどう育てるか そばセット (SOBA-SET) で自尊感情を測る」(著) 近藤 卓 (出版社) ほんの森出版) を基に作成し、学校独自で「こころのかがみアンケート」という名称を付け、実施した。本学院では年4回、児童生徒を対象に「いじめ防止に向けたアンケート」を実施していたが、そのうちの2回を「こころのかがみアンケート」に変更し、児童生徒の実態把握、その実態の変容把握に充てることにした。

○「言葉のプレゼント」「話し合いや意見交流」(小学部・部長、第3、6学年担任として)

派遣されていた3年間、学級担任として「言葉のプレゼントを贈ろう」という取り組みを行ってきた。これは、児童が他のクラスの児童に向けて贈るメッセージカードのことである。メッセージを送るタイミングは、大きな行事、クラスとして大切にしていたイベントの後で、活動準備期間、活動当日の友達の具体的な行動を取り上げ、褒めたり認め合ったりするのである。その後、クラスの友達から受け取ったメッセージをじっくり読んでもらい、読み終わったらその感想を書き、次の行事までの自分のめあてを考えるという活動である。

○「児童生徒会活動・委員会活動の活性化」(小学部・部長、生活指導部・部長、第6学年担任として)

本学院は、小学部と中学部が同じ校舎内にあり、委員会活動を一緒に行っている。この委員会活動は、本学院の課題に対し、私が直接働きかけることができる活動であった。そこで、児童生徒会活動の組織と取り組み方を見直した。担任として学級活動に力を入れてきたことを生かし、自主的・主体的な活動を本学院全体に広げる活動を行った。

これまでは、前年度取り組んでいたものをそのまま引き継ぐ形で児童生徒会活動が行われていたが、一度立ち止まり、1) それぞれの活動が本学院にとってどのような成果をもたらしているのか、2) 本学院をよりよくするには、他にどのような活動が考えられるのか、これら2点について教員、児童生徒に投げかけた。その過程で、自主的・主体的な活動を先導する児童生徒の育成と児童生徒会活動の組織の再編という課題が浮かび上がってきた。これらに対し、小・中学部の児童生徒を縦のつながりで捉えられるという利点を最大限生かすことで、日本コース内はもちろん、メキシココースへ向けて積極的に関わっていかうとする児童生徒の意欲を引き出すことができた。

(2) 課題②に向けて 「児童の実態を踏まえた国語科と社会科のカリキュラム作りの実践」

○国語科を通した取り組み (主に読書活動)

もともと日本語にふれる機会が不足している現状に対し、教師としてできることは、授業を通して多くの日本語に触れさせることだと考えた。そこで、教科書から発展させ、「並行読書」「作者読み」などを単元計画の中に位置づけ、取り組んだ。幸いなことに、本学院は週の時間割の中に「図書」という時間を設けていたため、定められた単元時数と「図書」の時間を有機的に組み合わせることで、学習内容を深めつつ、幅広く本に触れる機会を創る工夫ができた。

○社会科を通した現地理理解教育の取り組み

海外にある日本人学校で教える教科において、社会科は特殊且つ工夫が求められる教科である。第3学年では、地域社会を扱う単元や販売・生産活動を実際に見学して学習を深めていく単元などがあり、現地の地域社会と直に触れ合うこととなる。幸いなことに、現地のメキシコ企業・日本企業の方々のご協力もあり、学習内容を網羅することができている。さらに、日本とメキシコの相違点を見付ける活動も組み込むことができた。

また、第6学年では、日本の歴史や政治の仕組みに関する学習を行う。しかし、どちらも海外で生活をしていると、これらの学習は実生活とはかけ離れた学習となってしまう。そこで、総合的な学習の時間と連携させてカリキュラムを構成することで、日本とメキシコの相違点を見付ける活動にも組み込むことができた。

(3) 課題③に向けて「小学部第3学年「折り紙こま作り交流」、第6学年の「和太鼓交流」の実践」

○小学部第3学年「折り紙こま作り交流」について

本学院のメキシココース児童生徒は日本文化の学習を積極的に取り入れている。その中でも折り紙は、毎年取り組まれているものである。また、調べてみると、メキシコでも「こま」を使って遊ぶことが分かった。

これらを第3学年の国語科単元「こまを楽しむ」と関連させ、メキシココース児童との「折り紙こま作り交流」授業を行った。国語科の教材文に書かれていることや調べ学習でわかった日本文化をメキシココース児童に紹介する活動とメキシココース児童と一緒に折り紙こまを作る活動で構成し、日本語とスペイン語を使って交流した。

○小学部第6学年「和太鼓交流」について

和太鼓の学習は、本学院の日本コース・第6学年で伝統的に取り組まれてきたものである。また、メキシココース小学部の日本文化の学習でも和太鼓を取り上げられていた。しかし、どちらかという楽器として触れるという程度で演奏をしたり文化的背景を積極的に学んだりするというものではなかった。また、日本コースとしても、第6学年になって初めて和太鼓に触れるということもあり、なかなかメキシココース児童に教えるというところまで学習を深めることができずにいた。しかし、さらに調査を進めると、メキシココース高等部では、本格的に和太鼓の演奏をしていることが分かった。そこで、これまでの和太鼓学習のカリキュラムを見直し、1) メキシココース高等部生徒の和太鼓学習に参加し、日本コース児童の和太鼓学習への意欲を高める。⇒ 2) 習ったことを活用しメキシココース児童と和太鼓を通して交流する。⇒ 3) さらに練習を重ね、メキシココース児童生徒およびその保護者や教職員に向けて発表するという年間カリキュラムを作成した。

4. 各課題（①～③）に向けた調査・研究及び実践の考察

課題①： 児童生徒の自主性・主体性に課題があるということは、私が赴任した当時から代々訴えられていたことであり、派遣教員の赴任期間を考えるとなかなか手をつけられるものではないというジレンマを抱えている雰囲気も感じられた。しかし、これらに対して何とか策を講じていこうという当時の教職員の意思統一を図ることで、取り組み始めたことを今でも覚えている。その結果、児童生徒の実態把握の方法に多様性をもたせ、具体的な方策を学級、小学部、日本コース全体へと広げていくことができたと考えられる。その成果は、児童生徒会の取り組みをみると良く分かる。3年目を迎えた今は、日本コースからメキシココースに向けて活動を広げる試みが見られるようになってきた。今後は、これらの活動を教師からの発信ではなく、児童生徒からの発信で継続させていく手立てと支援を確立していくことが望まれる。

課題②： 日本語教育と現地理理解教育の推進は、日本人学校としてたいへん教育的意義を持つものである。そして、これらを日々の授業や教育活動の中で統合し、関連付けることは、児童生徒に学習の流れの中で学習意欲を継続させた状態で取り組ませるための教師側の手立てだと考える。教科書から学ぶことは多くある。しかし、それだけに満足することなく教科書を通して学びを広げていくことは、海外にある日本人学校の児童生徒に、質・量ともに充実した学習を保障する意味でも重要なことである。

課題③： 現地理理解教育という面でいえば、本学院の特徴である日本コースとメキシココースが同じ敷地内にあることは、非常に有益である。しかも、日々の授業を通して、また、普段の生活の中で交流できる環境は、何物にも代えがたい。交流は、本学院の主要な事業であるとともに、将来、日本とメキシコをつなぐ人材作りに欠かすことのできない教育の機会である。両コース児童生徒が自然体で関わるができる環境整備を怠ることなく、日々改善に力を尽くしていくことが望まれる。

5. おわりに

派遣期間の3年を振り返ってみると、改めて、本学院に特殊性や独自性があったことを痛感させられる。最

終報告書に書いた以外のことでも様々なことを経験させてもらった。特に、3年間、日本コース・メキシココース合同運動会に関わり、内1年間は総指揮をさせていただいたことは、非常に印象深い。11月の運動会に向けて、日本コースとしては6月から、日本コース・メキシココース合同としては9月から動き出す。会議はスペイン語と日本語を用いる。私は、日本文化である運動会をどのように伝え、どのようにして両コース児童生徒および教職員が円滑に関わり合っていけるかを考えながら運営していくことに力を注いだ。この経験は、まさに、児童生徒でいうところの現地理解であり、異文化理解であった。児童生徒と一緒にこれらのことを経験できたことが、私にとって財産となっていることは間違いない。